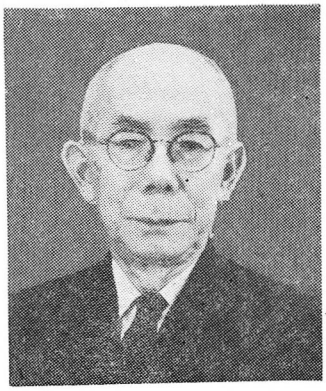
在りし日の島先生を偲んで

北大教授　沢田英吉



島　善鄰先生と言えばリンゴの神様として、多くの業蹟を残された方でありますが「牧草と園芸」でも創刊以来、星野大先生と共に種々御指導を賜って参りました。八月九日、御逝去なされましたので、追悼の辞を沢田先生にお願いいたしました。

本誌からの要望に応え、在りし日の先生の思い出を綴り、先生を偲ぶよすがにしたいと思う。

恩師を批判する様で、誠に恐縮であるが、先生は信念の人であったと思う。御自身正しいと判断された事は、相手が誰であろうと、堂々と自己の信念を主張し、決して、安易な妥協などはなさらなかった。そうした例は、今更ここに掲げるまでもなく、日常、会議の席等でよくお見受けする事であった。

これが若し先生が八方美人的な円満な方であり、事無かれ主義に終始された方であったなら、先生の魅力は半減したであろう。多くの人々から尊敬され、信頼され、期待された所以のものは、信念の人として魅力を感じたからであろう。

先生が思った事をずばずば言はれたよい例としてこんなケースもあった。

余市山田村の北大付属果樹園内には堂々たる二階建の講堂が建っている。この講堂は実は、余市町から北大に寄贈されたものなのである。それは今から十数年前のことであったが、その講堂の落成祝賀並びに譲渡式には先生は北大の学長として臨まれたのである。町長その他の挨拶に継いで、愈々先生が壇上に立たれ、述べられた御挨拶は大要次のようなものであった。『きくところによると、当地方の業者は、北海道果樹協会の会費を滞納しているということであるが、そのような不心得な人々からは、仮令どんな立派な講堂を幾棟寄贈されようとも少しも嬉しくない』この一言で一同は顔色を失って了ったのである。先生は更に語を継いで、「自分だってこうした芽出度い場所では、どんなことを言うべきか位のことはよく知っている。而し私としては、今述べた事は祝辞になっていると思うのである」と。式が終ってから地元の人々は互いに「全く先生の仰言る通りだ」とささやき合っていた。

先生は又大の共産党嫌いで、蛇蝎（だかつ）の如くこれを毛嫌われた。学長になられてからも、時々、教室で、私共とお話されることもあったが、そうした場合、話題は多く赤の排撃であった。話に熱が入って来ると、「あの野郎共は……」と言う工合に悲憤慷慨されるので、恰も私共が赤で叱られてるかの様で、工合の悪いものがあった。先生が亡くなられてから奥様から「内の先生は常日頃、沢田君は大の共産党嫌いだとよく言ってましたヨ」ときかされ、先生も私をそうみて居られた事が判り、ほっとした次第である。

先生は又、清廉潔白で曲った事の大嫌いな御性格であった。先生が北大学長の候補として学内の噂にのぼったとき、一部には私に票の獲得運動をする様にすすめてくれた人もあったが、私は断固これを断わったのである。左様な行為をする事は、先生の徳を傷つけることは勿論、先生をどんなに立腹させることになるだろうと思ったからである。従って私は唯の一票すら運動しなかった。にも不拘、先生は堂々と学長に当選されたのである。純然たる信頼票のみによってである。如何にも先生らしい清潔な当選の仕振りであった。私はこうした清らかな選挙こそ大学の誇りとして永続させたいものと願っていたのである。然しその期待も島先生一代限りで費え去って了った。

先生は礼儀、俗な言葉で言えば仁義という事について、厳しい先生であった。であるから先生御自身が身を以てその範を示されたものである。例えば先生にとって一番大事な恩師といえば、星野勇三先生を指す事になるが、先生に対する島先生の態度は誠に謙譲そのものであった。北大学長という顕職にあり乍ら、一旦恩師の前に出られると、学生時代の島先生を連想させる位慇懃鄭重（いんぎんていちょう）を極めたものである。この点私など大いに反省させられた次第である。鳩に三枝の礼ありとか、三歩下って師の影を踏まずとかいう言葉もある位であるが、近頃の若い者の無作法極る態度には島先生もよく嘆いていられたものである。

次に先生の時間厳守のやかましかった事は、余りにも有名である。会合などには、必ず定刻前にキチンと出席されたものである。いわゆる日本時間打破のために身を以てその範を示されたものであろう。

この度の先生の葬儀は会葬者が千を越すという大葬儀であった。にも不拘、諸事万端、滞りなく進行し、予定の時間に一分の狂いもなく終了し得た事は、平素の先生の御教示に対し幾らかでも添い得たような気がする。

ついでながら先生の葬儀について、今一つ付加えておきたい事がある。

最近、葬儀屋も商売上手になって、葬儀の式場内に終始、悲しげなメロディーをテープで流すのが普通となっている。今春、さる葬儀で先生は傍の私に「君あの音楽を流すのはいけないネ、仏教の堕落（だらく）だヨ」と、ひどく慨嘆された事があった。この事を知っている私としては、今回の先生

の葬儀にその音楽を流す事は断じて止めてもらはねばならなかった。先生はさぞかし棺の中から、メロディー抜きのしめやかな式を御万足気に御覧下さったことと思う。

先生の一徹であった事を物語る例としてこんな事もある。戦後出現して来た新農薬の内には、効き目も良いかわり、人畜にも有害なものが少なくないのである。先生はこうした薬剤を使用する事を非常に嫌われた。だから先生は宴会の席などで出されたサラダ料理の中の胡瓜だけは絶対手をつけず、皿の上に残された。というのは、胡瓜にフォリドールを使用してる農家があるという事を耳にされたからである。又 2.4.5 T.p というリンゴの熟期促進剤がある。この薬を撒布すると、リンゴが一ヵ月も早く熟するのである(早生種、中生種で)。ところが先生は絶対この様なリンゴは召上らなかった。毒性の無い事を御説明しても頑としておきき入れなさらなかった。

食べ物の好みにしても同様で、先生は決して私共の様な悪食屋ではなかった。例えば、牛のタンなどは大の苦手であった様である。ところが、先生が会長になられてから最初の互酪会(肉や酪農製品を試食する会)の料理が牛の舌を主体としたものであったのは何という皮肉な事であったろう。「だから僕なんか、この会の会長になる資格はないとあれ程辞退したではないか」と苦笑して居られた。

恐らく先生には鳥のモツ料理も禁物であったろうと思う。要するに、先生にとっては、味の良し悪しなどは問題ではないのであって、舌といい、臓物ときいただけで嫌気がさされたのであろう。

以上の様に書き連ねて来ると、先生は如何にも頑固一徹な方であったかの様な印象を与えるかも知れない。而し、先生は人情味豊かで親しみ易い半面をお持ちであった。この半面故に先生は皆から親しまれ尊敬されたと言ってもよいと思う。

先生はよく人の面倒をみられた。助教授、教授時代を通じ十有余年の久しきに亘り、北大の同窓会の理事として農学部卒業生の就職のお世話をなさった。その数は恐らく千名以上にも達したであろう。

昨今の様に就職の容易な時代なら別のこと、戦前の極度の就職難の時代にこれ程多くの学生を職にありつかせるのは並み大抵な御苦労ではなかったろうと思う。

先生は唯単に学生ばかりでなく、同県人や知人関係を始め、りんご栽培者や、国際農友会関係の青年に至る迄実によく面倒をみられた。私なども今日に至る迄どれ程先生の御厚意に浴したか知れない。そのほんの一例としてこんな事もあった。支那事変中のことである。支那大陸と台湾との間にある舟山列島を占領した海軍側から北大に同列島の農事視察員を派遣されたき旨の要望があった。そんな珍しいところなら、誰だって行ってみたい好奇心にそそられるというものである。ところが先生は自ら彼地に出張さるる事を希望せられ、その事によって他からの希望者を抑えられたのである。ところが愈々出発間際になって、先生は事情によって、出張出来なくなったからと言われて私を代理に推して下されたのである。お蔭で私は生れて初めての国外旅行も出来、普通では到底見る事の出来ない舟山列島を始め支那、満州国まで視る事が出来たのである。先生は初めから私を出張させるお積りで、表面だけ先生が出張を希望される形をとられたのである。以上は単に一例に過ぎないが、先生という人はそういう腹芸までして自分の門下生を可愛がって下さる方であったのである。

先生のお宅の床の間には紫檀製の支那のジャンクの置物があるが、それは私が先生への土産に抗州で買い求めた品である。それをみると先生の御温情をほのぼのと肌身に感ずる思いがする。

先生は非常に人情味の深いお方であられた事は、誰かが入院中という噂をきかれると、早速お見舞にかけつけられた事にもよく現れていた。その際先生にとっては、相手の老若や社会的地位などは問題ではないのである。人間島として行動されただけなのである。雪印種苗の故白幡君(北大時代、先生に教わり、卒業後も先生の教室に世話になった)を大学病院に見舞われたとき、(私も御案内傍々お伴をしたのであるが、)白幡君は、病床の上に正座し、双手をついて低く頭を垂れ感涙にむせんだのである。島先生のお見舞など予想だにしなかっただけに彼の感激は一入(ひとしお)なものがあったのであろう。本人には知らせてなかったが、所詮再起の見込みのない病気であったのである。傍らでこの情景をみていて、私も目がしらの熱つくなるのを禁じ得なかった。

先生は亡くなられた伊藤誠哉先生(島先生の前任学長)の病床にも幾度となく見舞われた様である。何でも亡くなられる二日前とかにも見舞われたそうであるが、当時既に昏睡状態を続けて居られた伊藤先生であったが、島先生であることをよく判られ、大変お喜びになり「極楽浄土の夢をみてた」と仰言られたそうである(島先生から直におききした話)。

抑々伊藤先生と島先生との間には昔から深い因縁があった様である。と言うのは、島先生が学長に当選されたとき、伊藤先生はこんな懐旧談をされた事がある。「島君が青森県に赴任するとき、実は、初めはなかなかうんとは言わなかったのだヨ、そこで私が『是非行け。その代り君の骨は将来必ずこの俺がひろってやるから』と言ってやっと承諾させたのだ。今回島君が私の後を継いで学長になってくれて、やっとその時の約束を果し得た様な気がする…」と。

島先生は又よく機智とユーモアに富んだお話をして人を笑わせる事がお得意であった。例えば、リンゴの品種にキ印(キジルシ)というのがあるというお話は文章にも書かれたし、ラジオでも放送された事がある。明治初年アメリカから七十余種のリンゴ苗木が入って来たが、それをいちいち、原名で呼ぶのが厄介なので、岩手県ではイ印ロ印という具合にイロハで呼ぶ事にしたためにいきおい、キ印という品種も出来たというのである。(因にキ印は今日の国光のことである)

先生は晩年少しもお酒を召されなかったから、先生をもともとの禁酒家である様に思い込んでいる人があるかも知れない。ところが先生は実によくお飲みになったのである。青森県時代の事はよく知らないが、弘前市の岡崎旅館(現在でもある)に下宿して居られた当時のエピソードは相当有名である。青森県から北大に赴任して来られた当時、先生はしみじみと「北大に来てほんとうによかった。そう飲まずに済むからね。お蔭で私の寿命も延びるヨ」と語られた事がある。青森ではいやでも心でも飲まねばならぬ事が多かった様である。先生は冗談混じりに彼地に於ける思い出話をこんな風にされた事がある「酔ってだらりと長い青ばなをたらした男からの盃も受けねば

ならなかったし、又なかには直かに盃を差しては技師様に失礼とでも考えてか、褌の端しをひっぱり出して、それで盃を拭って差し出すのもあった。しかもうすぎたない色をした褌でネ」と。

北大に来られてからでも、先生は可也よく飲まれた。宴会のあと、お宅の玄関までお見送り申し上げた事も幾度かあった程である。先生のお酒はにぎやかで明るいお酒であった。おばこ節が得意であり、（年末の名士の隠し芸にもやられた事がある）更に興が乗られると、番傘を持って化物退治の踊りもよくやられたものである。

斯様な先生がピッタリとお酒をやめられたのは昭和十八年に胆嚢炎（たんのうえん）で札幌病院に入院されて以来の事である。

由来私共の教室は初代の星野先生を始め、伝統的に酒の好きな教室なのであるが、その中にあって、先生お一人が酒をやめられ「どうもうちの教室のお爺さんと孫とが酒が好きで困るヨ」などと冗談めかして言われる様になったのだから大した変り様である。

でも昭和三十一年紫綬褒賞を拝受されたときには永年の禁を破り相当お飲みになった様である。

先生は元来、非常に健康に注意される方であった。先生の自彊術は青森県以来四十年の久しきに亘り一日も休まず続けられて来たものである。（但しお亡くなりになった日の朝だけは休まれたそうである）サル又一つの素裸で全身の力をふりしぼって演ぜられる自彊術は相当に烈しいものであった。何でも始めから終る迄十三分かかるのだそうで、先生は「だから僕は十三分居士と号しているのだ」と仰言って居られた。

先生はよく嗽（うがい）を励行された。毎日大学に着かれると御自分の部屋でガボガボとやられる。その音が実験室一つ差し挟んでその隣りの私の部屋迄きこえて来たのであるから大したものである。

昭和十八年の夏、先生のお伴をして満州に出張した事があったが、先生はニッケルの容器に脱脂綿を入れ、これにアルコールを沁ませたものを用意され、何を召上る場合でもその前に必ずアルコールで指先を消毒された。満州には美味しい甜瓜（あじうり）がとれるのであるが、先生は殆どこれに手を出されなかった。彼地では瓜類の追肥に下肥を用いるという事をきかれたからである。

以上色々の思い出を記して来たが、最後に私からみて、どうも先生らしくないと思われる一二のことについて述べてみたい。

先生は厳寒の候でも火の気のない部屋で自彊術をやられたのであるから、さぞかし寒さなんかへっちゃらかと思いの外、先生はむしろ人一倍の寒がり屋であった様である。戦時中は石炭の不足で冬の大学はとても寒かったものである。それは先生にとってとてもこたえたらしい。廊下を歩かれ乍ら「アーッ」「アーッ」と小声乍ら、連呼して歩かれるので、部屋の中に居乍ら、今廊下を歩いていられるのは島先生だということがすぐ判った。

今一つ先生らしくないと思われる癖に、両膝をガタガタと震わせる癖があった。俗に言う貧乏震いである。これは特に慎重にものを考えながらお話なさるときに出た様である。

先生はみだしなみのキチンとされた方であった。ワイシャツはいつも純白無垢であり、ズボンのプレスもいつもよく効いたものを着用され、洋服には毎日必ず御自分でブラッシュをかけられた。生地の好みもとても渋くて粋なものを好まれた様である。言うならば、日本人離れのした英国紳士と申上げたらピッタリであろう。そう言えば、先生はよく洋傘をステッキ代りについて歩かれた。こうした点まで英国紳士そっくりであった。

最後に極最近の思い出の二三を付加えてみたい。今春二月十一日、星野先生の九十才の祝いを催した際には、先生は一同を代表されて乾杯の音頭をとられたのであった。又近くは七月二十二日、北海道果樹協会副会長山際孫三郎氏の葬儀に於て先生は会葬者一同の代表として仏前に焼香されたのである。その時それから二十日足らずで、先生御自身が送られる身になろうとは誰が予測出来たであろう。いやそれどころか、八月十一日には先生の教え子のK君が久し振りで来札するというので、先生の御承諾の下に同君の歓迎会を催す事になって居り我々はその日の至るのを楽しみに待っていたのである。ところが何ぞはからん、八月十一日というその日はK君をも含めて我々一同涙の裡に先生の御通夜をする日となって了ったのである。誠に夢の様な話である。今更乍ら人生の果無さをしみじみと感ずずにはいられない。

私は常日頃、先生は間違いなく九十才以上も長生きされるに相違ないと信じていた。というのは第一にあのお顔の血色と艶（つや）のよさである。とても七十才を超えた人の肌とは思われないものがあった。第二は先生の眉毛の長さである。古来眉毛の長いのは長寿の相だと言われている。第三に皮膚のしみである。しみも亦長寿の証拠だとよく言われる。先生には、手やお顔は勿論だが、おつむには特に大きな印象的なしみがあられた。

ところが先生は忽然として他界されたのである。どうでも、信ずる事が出来ない気がする。而し先生は仮令あの世に行かれても少しもお寂しい思いはせられずに済む様に思われてならない。（せめてそうとでも思わなくては余りにも悲しい。）と言うのはあの世には、先生より先に既に多くの先輩知友が行って居られるからである。青森県時代先生が心から尊敬し、精神面でも非常に大きな感化を受けたと言われる外崎嘉七翁を始めとし、先生の青年時代からの親友であり、青森県りんご試験場長であった須佐寅三郎氏、長野県園芸試験場長であった飯森三男氏、北海道果樹協会長の現職で逝かれた荒川氏、梶川氏、赤塚氏、同じくつい先だって亡くなられた山際氏があり（特に梶川氏とは親身も唯ならぬ御交際であった）更に又、先生が助教授、教授時代を通じ、先生の下で大学のりんご園管理の任に当った竹内氏（北大果樹園）や樋口氏（北大余市果樹園）も居り、同じく蔬菜園を担当していた白幡氏（後に雪印種苗に入った）も居られる。といった様な工合で、いずれ劣らぬりんごのエキスパート揃いである。だから仮りに先生があの世で、先生の御専門のりんごのお話相手を需められても決して相手に事欠く事はないと思う。

最後に生前先生が心から私淑して居られた伊藤誠哉先生にも久し振りでお目にかかれると思う。先生はよく息子が父親に甘える様な態度で駄酒落（だじゃれ）を飛ばし、伊藤先生から「馬鹿な事を言うて……」などとほほ笑み返された事があったが、あの世でもさぞかし両先生は、仲睦まじく語り合われている事であろう。